

アムスルだより

No. 3

1993年 9月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875



ウミガメの産卵

今年7月17日、阿嘉小中学校の生徒たちがヒズシ浜でウミガメの赤ちゃんを放流しました。学校で孵化させてからまだ1週間のアカウミガメで、甲長(甲らの長さ)が4cm、体重約20gでした。また、7月21日には、研究所でちょうど1年育てたヤカビ島産のアオウミガメ6匹を、後ろ足に標識をつけて放流しました。このカメは生まれた時には甲長が約5cm、体重は22gぐらいでしたが、1年で甲長が約20cm、体重はなんと1kgを超えるまでになっていました。皆な元気に育ってくれるといいのですが・・・。

というわけで、今回はウミガメについてお話ししましょう。ウミガメは世界で8種類いると言われています。日本で産卵するのはアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種で、沖縄ではこれら3種全ての産卵が確認されています。産卵時期は少しずつずれていて、八重山での調査では、アカウミガメが4月から7月、ついでアオウミガメが

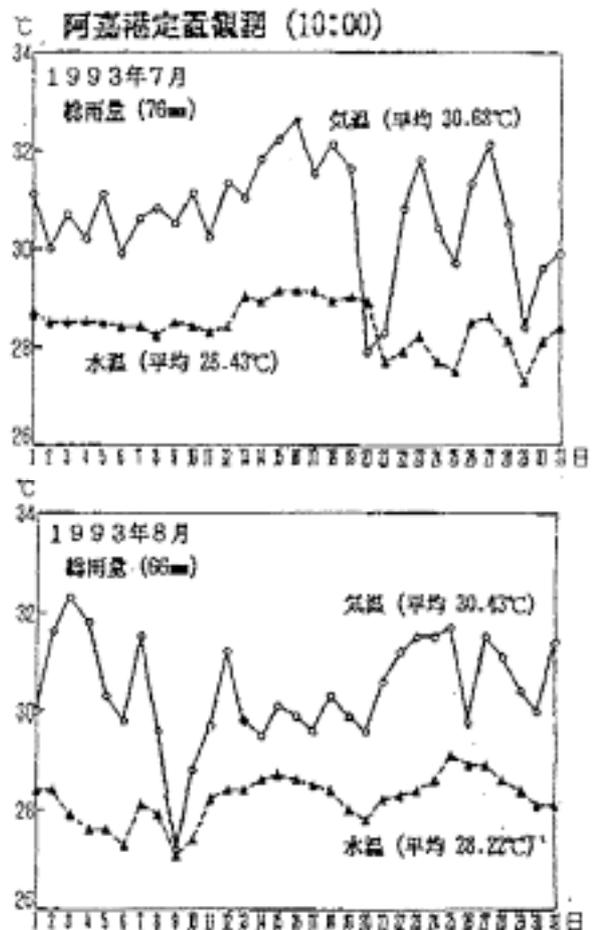
5月から8月、タイマイが最も遅く6月から9月に産卵するとされています。産卵は夜間に行われます。1m近い大きさの親ガメが砂浜に上がり、気に入った場所を見つけてはヒレを使って器用に穴を掘り、100個前後の卵を産み落とします。この巣穴を決めるまでのカメはとても神経質で、上陸する時にライトを当てたり、浜が騒がしかったりすると産卵せずに海へ帰ってしまいます。ですから、もしウミガメが産卵しそうな所に出くわしたら、騒がずにそっと見守ってあげて下さいね。

産卵された卵は砂中の温度にもよりますが、45~70日で孵化します。このウミガメの孵化についてはとても面白い現象が知られています。それは、孵化するまでの温度によって雄雌の割合が変わってくるというものです。室内の実験では、卵の埋まっている砂の温度が28~30度を境に、それより高いとほとんどが雌になり、低いと逆にほとんどが雄になるという結果がでています。自然では一体どのようにして雌雄のバランスがとられているのでしょうか。砂の中で孵化した子ガメは数日かかって表面近くまで上がり、周りの温度が下がることで夜を感じ、砂から

出て海に向かいます。夜だと海鳥や大きな魚などに見つかりにくいから、生き残る率が高くなるからでしょう。孵化したばかりの子ガメには光に集まる性質があるので、夜に明るく見える海の方に向かいます。しかし開発が進んだ海岸などでは、街灯に向かって行き、海にたどり着けずに死んでしまうことがあるそうです。うまくできた自然の本能も、環境を変えられてはたまりませんね。

さて、無事に海へ戻った子ガメ達。これからどんな運命が待っているのでしょうか。彼らが成長し、交尾や産卵をしに岸近くまでやってくるまで、どこでどんな生活をしているのか、実はほとんど分かってません。たぶん30年ぐらいで産卵できるようになるだろうと推測されていますから、今年放した子ガメ達が、ひょっとすると30年後に、どこかの海岸で産卵しているかもしれませんよ。その時にうまく、阿嘉島のような美しい砂浜にたどり着ければいいですね。

阿嘉島の海より - 台風とサンゴ -
 今年の夏、内地では悪天候が続き、冷夏でしたが、阿嘉島はほぼ平年並みでした。9月2日には戦後最大と言われた台風13号が阿嘉島の西を通過し、自然の恐ろしさを見せつけられました。2年前の9月にも今回と似たコースで台風19号が通過しました。この時は特にニシハマで被害が大きく、枝状やテーブル状サンゴの多くが破壊され、



その数カ月後には、サンゴを食べる貝(シロレイシガイダマシ類)が増えました。サンゴ礁の発達には適度な攪乱も必要です。折れて散乱したサンゴのうち生き残ったものは、そこで成長し分布を広げます、しかし折れたり土砂をかぶったサンゴは衰弱するため、サンゴを食べる生物にとって格好の餌食になります。その後サンゴは回復しましたが、今回の台風でまたかなり破壊されています。今度はどんな影響が出るのでしょうか。

11月10日発行予定の次号では、サンゴを食べる貝について、さらに詳しくお話しします。